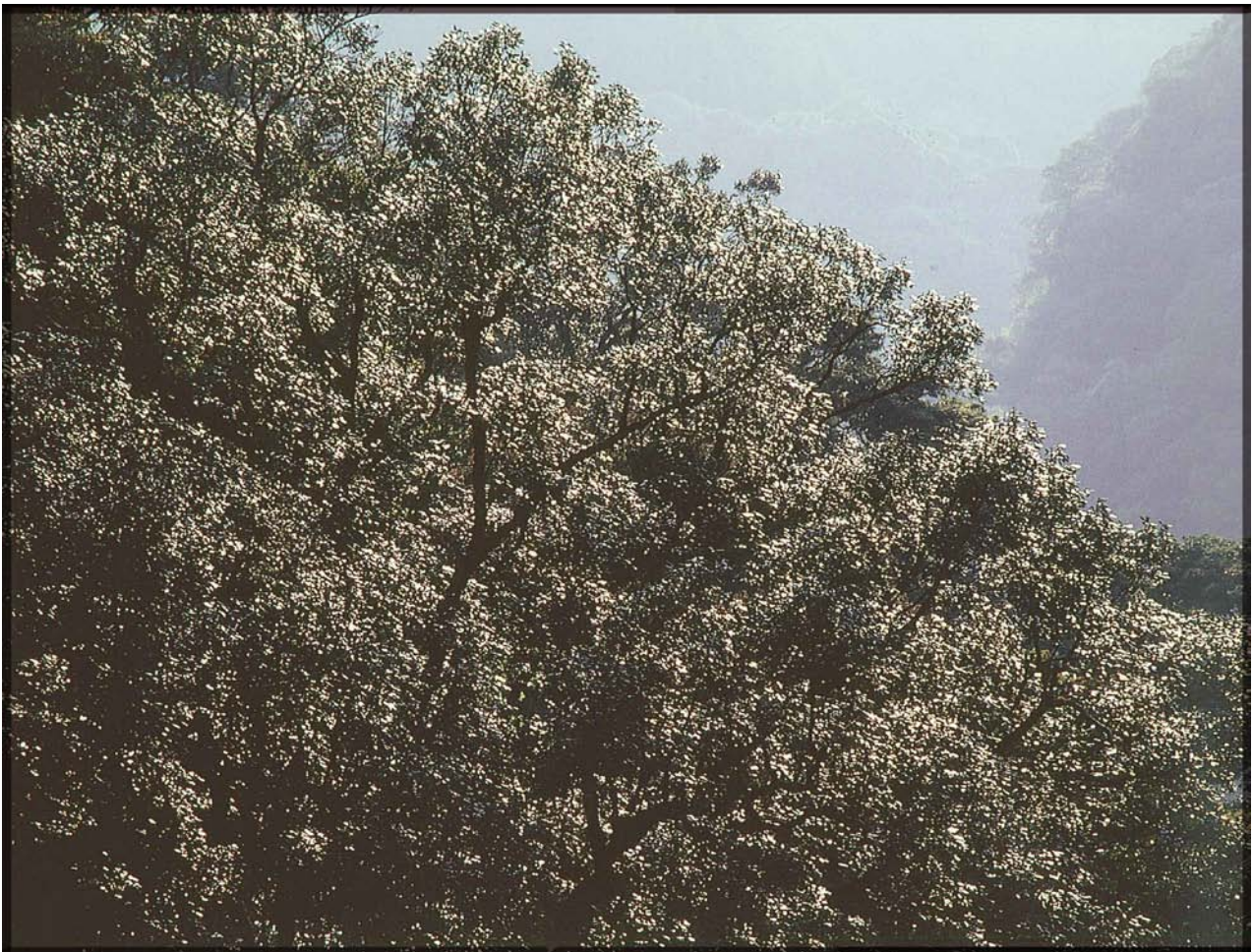


照葉樹林だより

ISSN 1880-8794

てるはの森の会 会報第13号
2008年12月20日



光るイチイガシ 11月下旬、午後の斜光に光り輝く綾南川溪谷のイチイガシの大木。

撮影 坂元守雄

《 目 次 》

- ☆ 地域づくりワーキンググループに参加して
- ☆ JICA研修と綾プロジェクト
- ☆ 照葉樹林文化論との出会い
- ☆ 綾の森の沢調査 ③ 水生昆虫の隠れ方
- ☆ エッセー ～支えられて～「てるはの森の会」
- ☆ 事務局だより

発行：てるはの森の会

〒880-0014 宮崎県宮崎市鶴島2丁目9-6 みやざき

NPOハウス403号

TEL 0985-35-7288 / FAX 0985-35-7289

E-mail: teruha@miyazaki-catv.ne.jp

URL: <http://www.teruhanomori.com>

綾プロ地域づくりワーキンググループに参加して

地域づくりWG委員 根岸 裕孝

私は、宮崎大学で共通教育科目「宮崎県の経済と地域の活性化」を担当し、そのなかで「綾町の地域づくり」を紹介しています。テキストとして郷田実・郷田美紀子著『結いの心』（評言社）を使い、学生にはできるだけ綾町の訪問を促しレポート提出を促しています。

ただ、『結いの心』をテキストに用いるなかで自分に不安が生じました。それは、私自身もどれほど綾町を知っていて関わっているかです。大学教員としてこの疑問を持ちながら、「綾」をテーマとする授業を続けてよいのか悩んでいました。



結いの心（評言社）

そんな不安や疑問を持ちながらこの地域づくりWGに参加させていただき、住民の皆さんもいろいろ悩みながら地域づくりに取り組まれていることが少しずつですがわかりはじめたところです。

先日、綾照葉樹林マラソンに参

加しました。ハーフマラソンにチャレンジしましたが、最後尾をなんとか走りながら3時間10分で完走です。走りながら（最後は歩きながら）声援を送っていただいた綾町の皆さんに本当に感謝です。給水所で地区の皆さんが暖かくもてなしをしていただき、完走への不安のなかでとても勇気づけられました。

綾町は、地域経済学の分野で地域振興のモデルである「内発的発展」の考え方を実践した町として著名です。企業誘致に頼らず、照葉樹林という地域資源を活かしながら町内の雇用と地域の文化の発展と住民福祉の向上を目指す取り組みは、全国の研究者から注目されています。



地域づくりワーキンググループ（月1回開催）

ただ、綾町と関わりを持ち始めてひとつどうしても疑問に思ったことがありました。それは、役場の役割や職員の存在感です。これだけ有名な町であれば、役場には、元気のよい役場職員の方がいらして、今後のまちづくりについて夢や希望を聞き、小規模自治体ならではの役場の存在感や全国に広がる人的なネットワークを感じるができます。小規模自治体として合併しないで自立を選択した町ですから、いかに住民との協働を展開していくかは、非常に大切な問題なはずですが、若手職員からは、「照葉樹林都市綾はかくあるべき」、「住民との協働のまちづくりはこうあるべき」「誇りある綾の姿とは」などが聞けるはずですが、まだ私はこうした元気のある職員の方にお会いしたことがありません（もしこれを読まれて我こそはと思われる役場職員の方は、大学の研究室直通（0985-58-7480）にご連絡いただければ幸いです）。是非とも町長さんはじめ幹部のみなさんがこころがけて役場からそうした雰囲気づくりをお願いしたいものです。そして綾の未来を担う若い人のチャレンジ精神を醸成する雰囲気づくりをお願いしたいところです。

厳しい地域経済・社会のなかで「そもそも」を語る力こそが、未来を創る原点だと思います。自分たちの地域社会のあり方について立場を超えて自由闊達に議論し夢を語る雰囲気が町内で出てくることが、求められていると思います。

（ねぎしひろたか・宮崎大学・宮崎市）

JICA研修と綾プロジェクト

「賢治の学校」柳 周明

独立行政法人国際協力機構（JICA）の依頼で、2006年から綾と同じ照葉樹林帯に属するラオス国研修員（農林省農林普及局に属し、ラオス北部各県の農林業の普及職員）の「ラオス森林管理・住民支援プロジェクト」研修会が「賢治の学校」で始まりました。

ラオス北部は綾と同じ照葉樹林帯に属していますが、焼畑により森林率が急落（今年の情報では4.2%）しており、危機的な状況を迎えています。そのために[JICAは焼畑耕作の安定化や貧困削減に効果的な森林の保全・復旧及び生計向上のための改善を図るための技術協力をラオス国において行って]（[]内はJICA資料によります。以下同じ）おり、本研修会においても[①焼き畑に代わる生産活動（生計向上手段）の支援②持続的な森林利用、森林土地の保全を住民の主体的管理によって実現する]ための学びが期待されています。

官民5者の協力事業である「綾の照葉樹林プロジェクト」の存在が、綾にラオス研修会を呼び寄せたのだと思います。ラオスで実現されるべき[住民の主体的管理]は、てるはの森の会の活動の中にすでに範として現れており、官民協力の流れは国境を越えて時代の要請と言うべきものになっているからです。本研修会も、5者協力構造のなかで実施されており、ご尽力下さいました関係者の皆様に心から感謝しております。



宮崎森林管理署署員の指導の下、間伐体験中

本年度の研修会は10月6日～11日までの6日間行われました。ご都合の為に上野登先生には参加頂けなかったものの、綾町照葉樹林文化推進監になられた河野耕三先生の森林保護のための講座と大吊橋から大森岳周辺まで移動しながら具体的な保護の方法を学ぶ移動講座が始まりました。例年お世話になっている坂元守雄先生の森作りの講座では、森作りが進むなかで水が湧き出し、川ができた感動的なお話を聞くことができました。温暖化で干ばつも頻発するとされており、当校でも森作りを視野に入れた農業（＝水の確保）を学ぶ必要性を痛感しております。



樹高15mほどのスギを伐り倒しました

ラオス研修として始まったJICA依頼研修会ですが、今後は他の照葉樹林帯に属する国々からも研修員を迎えようと考えJICAへ働きかけております。東アジア各国の研修員が宮崎・綾を訪れる日も遠くないと確信しております。

（なやぎしゅうめい・賢治の学校・綾町）

賢治の学校、綾自然農実践場とは、

宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』を精神とし、耕さず、肥料農薬を必要とせず、草や虫を敵としない「自然農」で作物を育てているところです。この実践場は、2000年4月に開校し、綾前町長 郷田實氏、東京賢治の学校代表鳥山敏子さん他10数人の有志たちで始めました。「自然農をやってみよう」と集まってきた若者・大人たちと農的生活・自給自足の生活を目指しています。（TEL 0985-30-7090）

照葉樹林文化論との出会い

てるはの森の会代表 上野 登

私が照葉樹林の存在が貴重であることに気がついたのは、昭和40年頃からでした。私は41年に宮大の山岳部員と台湾の雪山に「遠征」してから、宮崎県の山岳連盟の会長に推薦され引き受けました。その任務は県岳連のヒマラヤ登山の組織化ということでした。その頃私は、宮大の教育学部の地理教室の学生と登山を楽しくやっていました。大崩山登山は、秋の連休恒例登山でした。43年の秋、大崩山荘前の谷の奥で発破の音がするので、現場に行って驚きました。林道が建設され、その先端は坊主尾根のところに達しようとしていました。これは大変だと考え、早速日本自然保護協会の九州支部に保護運動を訴えました。その時の支部長は岩切章太郎さんで、保護協会のブナ林保護の陳情を県民運動に切り替えてもらいました。こうして「大崩山を守る会」が、時の丸山県会議長さんを会長として結成され、運動が展開されました。



大崩を守る運動 三里河原 S40年頃

私は地理学の学生と一緒に、市房山、霧立・後霧立、祖母山、傾山などの稜線を歩き、その稜線にブナ林が植生していることに興味をもっていました。祖母・傾の縦走路を歩いていると、チェーンソーの音が聞こえ始め、谷底から皆伐の波が押し寄せていることに感慨を覚えていました。その波が大崩山にも及んできたのです。私たちは「守る会」の運動に積極的に取り組みました、県民運動は多くの署名を集め、九州営林局との交渉に入りました。その時の局長は松形祐堯さんで、私は松形さんと一斉植林の在り方の是非を論争したり、樺などとの混合植林(現在の言葉でいえば複層林)が正当ではないかなどと主張したりしました。

このような交渉に耳を傾けられたのか、松形さんは45年策定の施業計画にたいし、大崩山の2種、3種林の伐採は凍結するという断を下されました。1982年に祖母・傾・大崩山域が森林生態系保護地域に指定されるまでの間、5年毎に凍結運動を続けて、大崩山のブナ林の保護を達成することができました。



槍ヶ岳を背景に 左が上野代表 S43年

大崩山の運動が契機となって「宮崎の自然を守る会」が結成され、「自然教室」を開催するなど自然保護運動が展開されました。しかも県内各地に自然保護運動が起こり、宮崎県環境連絡協議会が結成されるような大きな流れができました。そういう状況の中で突如として「中霧島有料道路建設」問題が提起され、「宮崎の自然を守る会」にアセスメント調査依頼がでてきました。

「守る会」は大崩山の時に学術調査団方式を経験していましたので、宮大や野鳥の会などの人たちと調査団を組み、建設の是非を検討しました。県庁の関係者は「調査費は県が出したので、まさか反対の結論は出さないだろう」と言っていたのですが、調査団の結論は「駄目だ」という見解でした。そして霧島山の麓の山岳会やその他の市民団体と一緒に環境庁に陳情に出かけました。幸い県選出の代議士さんの紹介で、三木武夫長官と会い意見を交わすことができました。三木さんは「あの黒木知事がそんな馬鹿なことをする筈がない」と発言されました。霧島山は国立公園ですので、環境庁との相談が先ずあって計画が出てくるのが筋なのに、相談なしに問題が出てきたようでしたので、この計画は「うやむやのうちに」消えました。

この調査で私は、霧島連山の林相の垂直分布に興味をもちました。樫を中心とした常緑広葉樹林を麓にもち、標高が高くなるにつれて落葉広葉樹が多くなり、山頂部はミズナラになっています。松をみても麓は黒松ですが、高くなると赤松です。また高千穂峰の山肌をみると、噴火の後の裸山が下から陰性灌木林、陽性型の叢林、カヤ類の草地、苔地、そして露地という変化を示していました。これは森林が形成されていくサクセッション（遷移過程）で、その典型と考えました。また高千穂河原の南東の草地で、鹿の寝床？を発見しましたが、そこは牡鹿の縄張りの見張り地で、その牡鹿と遭遇し、大きな口を開けてガクッと噛む威嚇を受けました。また皇子原への山道でドサッと音がしたので見ますと、腕くらいの大きさの腹をした蛇がいました。シッと脅してみましたが、逃げるところかこちらに来ますので去りました。下山してその話を高原の山岳会の人にしたら、そこは大蛇伝説のある場所で「先生は良い経験をされた」と評価されました。

この調査で私は、海岸沿いには椎が優占しているが、内陸へ、そして標高が高くなるにつれて樫に代わり、さらに高くなるとミズナラからブナへと変化する林相の垂直構造に興味を持ちました。そして植物図鑑をみて調べたところ、それはブナ科の樹木であることが分かりました。ブナ科の樹木が温かいところでは常緑広葉樹、寒くなるにつれて落葉広葉樹になるという種の適応構造があることが分かりました。宮崎県はそのブナ科の樹種を垂直的にすべて持っている県だということも分かりました。

私が照葉樹林という林相名を知ったのは、中尾佐助さんの『栽培植物と農耕の起源』という本からでした。中尾さんは今西錦司先生のマナスル偵察に同行し、ネパールの森林と食文化に日本との共通性を直感し、その後東南アジア各地の調査を踏まえて岩波新書にまとめられたのです。中尾さんは照葉樹林複合農耕文化を提起されたのですが、この発想を哲学者の上山春平さんが日本文化論にまで高め、『照葉樹林文化』という日本文化の古層を提案されました。私はこの文化論に興味をもち、上山さんとの交流が始まったのです。日本文化の古層を探ると縄文文化と弥生文化があり、縄文はブナ林文化、弥生は照葉樹林文化がベースにあると提案されたのです。

日本文化論に関連して、青森県の三内丸山遺跡の縄文文化が大変な反響を呼びました。しかし九

州にも縄文文化の遺跡は沢山あります。綾町でも尾立遺跡があります。Uターン現象が起こった時、九州山口経済連合会から頼まれてその原因を研究するために、薩摩半島の町村を廻りましたが、縄文文化の遺跡は小さい入り江の奥に沢山ありました。そしてついに国分市の上野原遺跡が発掘され、三内丸山より古く、かつ大きな集落の規模でした。これは何を意味するのか。私は、地球全体の第4氷河期が終わり、間氷期に傾斜していく過程で、地球が温暖化していくのが関係していると考えます。後氷期の時代には薩摩半島はブナ林で覆われていました。しかし温暖化につれて常緑型のブナ科樹木が北上してくるので、落葉型は北方への移動や、標高の高いところへの後退を余儀なくされたのです。この結果、宮崎では縄文文化の遺跡と弥生文化の遺跡を見ることができるのです。

縄文の名残は地名にも残っています。昔のことですが、教育学部の音楽の先生がアイヌの酋長さんを連れてきたことがありました。その時の印象で今でも残っているのは、市内の別府をビューと読んでいますが、アイヌの酋長さんはそれをアイヌ語だと言っていました。私たちは、それとは知らずに古い文化の重なるの風土のなかで生活しているのだと実感しました。



綾プロジェクト調印式 中央上野代表

その日本文化が戦後の経済思想の流れを受けて、大きく変わり始めました。その一つが

森林の拡大造林事業です。原生林はサクセッションでは極相林といわれます。これは植生の定常形態で、エネルギー的には一定状態です。これを伐採して植林すると、年間の樹木の増加率は高くなります。それを高度経済成長論と重ねて、造林事業が展開されたのです。しかしその単層林の弱点が反省されるようになりました。世界的にも持続可能な森林機能の維持・創造の道を探る時代になりました。その一つの試みが綾の照葉樹林復元のプロジェクトです。

(うえののぼる・宮崎市)

綾の森の沢調査 ③

水生昆虫の隠れ方(コバントビケラの場合)

会員 林 裕美子

森の沢調査では、水生昆虫も調べています。動いているものを見ると追いかけてくるといふ(私の)習性を生かして始めました。

溪流でよく目にする動物といえば、サカナやサワガニです。石の表面の藻や、落葉、水中の虫などを食べています。水生昆虫の多くは、このような動物(捕食者)に食べられないように、石や砂利のすきまや、落葉の中に隠れて生活しています。

隠れ方は、虫によってさまざまに工夫が凝らされています。扁平な体で石の表面をすばやく動いて裏側へ回り込むものもあれば(ヒラタカゲロウ)、小石をつなぎ合わせて頑丈な筒の巣をつくるものもいます(ニンギョウトビケラ)(山口県岩国市では、この筒の巣を「石人形」と呼んで、お土産物にして売っているらしい)。落ち葉から、小さな正方形をたくさん切り取り、それをつづり合わせて四角柱の落ち葉の筒巣を作る器用なものもいます(カクツツトビケラ)。

私たちが調査している沢では、冬になるとコバントビケラをたくさん見かけます。「小判」の形に葉を切り取り(大小2枚)、それを貼り合わせて、その間に幼虫が入っています。水の中に楕円形の落ち葉が沈んでいるようにしか見えませんが、そっとしておく、落ち葉がごそごそと移動していきます。

何の落ち葉を使うのかな?という疑問が



コバントビケラの巣

湧いたのですが、長さ2cmくらいの楕円に切り取られた葉から樹種を調べるのは難しいことがわかりました。そこで、楕円が切り取られた葉を集めてみました。沢の落ち葉だまりでたくさん見つかります。樹種を教えてくださいのために河野耕三先生を訪ねました。合計161枚もありましたが、1枚1枚、時にはルーペをのぞきながら、名前を教えてくださいました。



コバントビケラに切り取られた落ち葉

照葉樹自然林が多い沢では、アラカシ(53%)とホソバタブ(11%)の利用が多く、針葉樹人工林が多い沢では、クマノミズキ(57%)、アラカシ(14%)、ムラサキシキブ(あるいはヤブムラサキ、13%)の利用が多いことがわかりました。流れてくる数が多い落ち葉を利用しているということだと思いますが、人工林の沢では、落葉樹の利用が80%近くになり、沢沿いには落葉樹が多いことがうかがわれました。

冬の沢の水温は、時には6℃くらいにまで下がります。冷たい水の中から、藤本綾子さんと大津留タカ子さんがいつも虫を探してください。半分腐ったような落ち葉の中から、「小判」が次々と見つかり、ちょっと得をした気分です。

<参考文献>『原色 川虫図鑑』谷田監修、丸山・高井著、全国農村教育協会

(はやしゆみこ・

HAYASHI 英語サポート事務所・宮崎市)



～支えられて～「てるはの森の会」

事務局 相馬 美佐子

会員の皆様、始めまして。

昨年 9 月から、「てるはの森の会」事務局の仕事を担当しています相馬です。今回は事務局のことについてお話ししましょう。

事務局は、宮崎市役所近くのみやざき NPO ハウス(宮崎県の旧独身寮)4 階にあります。NPO ハウスは、ユニセフ等 NPO 関係の団体が 20 団体ほど入居しています。2 階には NPO 法人アジア砒素ネットワークもあり、本会代表の上野登先生の書斎もあります。

事務局の仕事は、主に 2 つ。1 つは、綾の照葉樹林プロジェクト連携会議事務局の仕事。これは月 1 回の連絡調整会議と年 2 回の連携会議の準備です。もう 1 つは、勿論「てるはの森の会」の活動です。また照葉樹林ガイドボランティアにも同行し、綾プロジェクトの普及啓発も行っております。

事務局は、事務局長石田達也と相馬で運営しており、会員の皆様にさまざまな形で助けていただいています。

この「照葉樹林だより」は、事務局が編集・印刷をしていますが、編集委員の坂元守雄さん、小川渉さん、林裕美子さんに記事執筆者の決定や助言・校正を手伝っていただいています。

また、毎月第 3 火曜日の 19 時、NPO ハウス会議室にて「てるはの森の会」定例会を開催し、上野代表他、会員の皆さんが参加して、活動報告や事業計画などを話し合っています。

本号の前頁で報告をしている沢調査も、会員の林さんを中心に、大津留司・タカ子さんご夫妻、藤本綾子さん達会員の皆様のご協力、月 1 回行われています。

本会の最大行事の年 2 回行われるボランティア復元作業、日本自然保護協会の指導の下行われる林床調査活動も、会員の参加で行われています。今年度は綾町有林の調査も始まり、林床調査の機会も増えています。植生の知識のある方はもちろん、初めての方も記録係(私はこれ専門です)も必要ですので、是非ご参加ください。調査に参加して森の奥まで足を運び、専門家の説明を聞けば、綾の森の魅力を再発見できるはずです。

そして全ての活動に指導・協力をしてくださる河野耕三先生。私が事務局を引き継いだばかりで行事参加者の確保に困っていた時、心配して方々へ参加お願いの電話をかけてくださった高松郁男さん。調査活動をはじめ必ず参加してくださる守田達朗さん。照葉樹林ガイドボランティアの皆様。本当に感謝しています。

このように多くの会員の皆様に支えられ、日々の活動が行われています。

(そうまみさこ・事務局・宮崎市)



事務局から

◆「てるはの森の会」関連行事

- 11月6日(木)第5回地域づくりワーキンググループ
 14日(金)第9回連携会議
 15日(土)第5回ボランティア復元作業
 22日(日)大隅照葉樹原生林シンポジウム参加
 12月2日(火)第7回連絡調整会議
 第2回綾プロジェクト説明会
 4日(木)第6回地域づくりワーキンググループ
 17日(水)第1回照葉樹林文化館市民協働協議会
 1月12日(月)照葉樹林研究フォーラム
 13日(火)第8回連絡調整会議
 2月15日(日)綾町公民館大会発表
 ※今号の発行は1月遅れの12月発行になりました。

◆照葉樹林ガイド付きツアー好評!

今回初めて、照葉樹林ガイド付き体験ツアーを開催しました。今まで団体予約の皆さんを案内してきましたが、地元宮崎の皆様幅広く、照葉樹林ガイドを知ってもらい、綾の森の魅力をお伝えしようと企画しました。

第1回	11月7日(金)	5名参加
第2回	11月23日(日)	24名参加
第3回	11月28日(金)	10名参加
第4回	12月5日(金)	雨天中止
第5回	12月7日(日)	19名参加



12月7日ガイドの様子

最終日は子ども2人を含む、19名の参加がありました。ガイドは朝広さん、金丸さん、駒田さん、山下さんの4名。

1グループ5人

ほどのグループに分かれ、初冬の綾の森を満喫しました。

ガイド付きツアー体験は好評で、参加者から春にもう一度行ってほしいとの要望が多数寄せられました。2009年3月に行う予定です。是非ご参加ください。

◆照葉樹林研究フォーラム ～森と水～

- 日時 2009年1月12日(日) 10:00～13:00
 場所 綾川荘 綾町北俣5539 (TEL 0985-77-0070)
 9:30……受付開始
 ～プログラム～
 「照葉樹林の多様性」
 服部 保 (兵庫県立大学)
 「台風が来たときの照葉樹林の被害について」
 齋藤 哲 (森林総合研究所)
 「森と川と海をつなぐ市民活動と教育・研究活動」
 寺井 久慈 (中部大学)
 「川の市民調査」
 村上 哲生 (名古屋女子大学)

総合討論

- 主催 てるはの森の会
 照葉樹林研究フォーラム実行委員会
 ○共催 綾町・綾の照葉樹林プロジェクト連携会議

◆申し込み及び問い合わせ先 てるはの森の会事務局
 〒880-0014

宮崎県宮崎市鶴島2丁目9-6 みやざき NPO ハウス 403号
 TEL 0985-35-7288 / FAX 0985-35-7289
 E-mail: teruha@miyazaki-catv.ne.jp

会員募集中!

「てるはの森の会」では、綾の照葉樹林プロジェクトにご協力いただける会員を募集しております。

年会費	個人サポート会員	2000円
	家族サポート会員	3000円
	団体サポート会員	5000円
	法人サポート会員	10000円

会員になっていただくと、照葉樹林やプロジェクトに関する情報を掲載した「照葉樹林だより」を年4回お届けします。プロジェクトが実施するイベントや各種行事に参加できます。

詳細は事務局までお気軽にお問合せください。

協賛企業

